

財團 明_治聖德記念學會紀要 第十六卷
法人

研
究

妙貞問答解題

阪 本 廣 太 郎

一 神宮文庫本の體裁

本書は上中下の三卷より成るものであるが、舊林崎文庫本(現神宮文庫藏)は上卷闕けて中下の二卷存するのみである。片假名楷書九行、一行の字數定まらず、中卷は墨付四十三枚、下卷は同四十七枚の半紙本で、その書寫の年代は分らないが、紙質字體等から考へて、少くとも徳川中期以前のものと思はれる。何れも、外題并に卷首に「妙貞問答」と題してあるが、中卷の扉に「虚實」^{二三}と題してあるのを見ると、或はこれも本書の一名であるかと思はれる。妙貞問答の名は、本書の内容が妙秀と幽貞といふ兩

女子の間答體にして記さるゝより名つけたので、虚實の名は、恐らくは神儒佛（即ち虚）と基督教（即ち實）とを對稱したので、本書下卷の初に、「惣シテ物ハ虚實ノニツガアル習イニテサフラヘバ、此現實ニ世ノ主ト申ニモ偽レル所ト眞ノ主トノ隔ヲヨクハキマエ給フベキ事」とあるより名付けたもので有らう。又その下「二三」とあるのは、この中卷には、神儒二道を破してあるので、上卷の佛教を破せるを一と數へて此等を二三と記したもので有らう。

本書は、もとより、その原本より數次の轉寫を経たもので、誤字脱字と思はるゝものも尠からずある。然してその傳來もまた不明であるが、佛教を破したる上卷の闕けて居る處から見れば、恐らくは佛者の手から本文庫に獻納したもので有らう。又本庫が貞享三年の創立であるから、その獻納の時代も貞享以後なることは勿論である。

二 本書の内容

本書は、今日に残つて居る我國最古の基督教の邦文傳道書である。その著作の趣旨は、本書の自跋に明かであるが故に之を引用する。

右此妙真問答ノアタル心口ハ、ヨシ有人ノ婦人后室ナト申ハ、出家トテモ、男子ニハタヤスク見テ、法ノ理リナカラモ尋玉フニ便ナキカ故ニ、願イ有テモ、空シク過シ玉フノミ也。去ハカヤウノ人々モ身ツカラ是ヲ誦ミ明メ、キリシタンノ教ヘノ有難程ヲモワキマヘ玉フヘキ爲ニツバリ出ス所、卷ノ數ヲハ上

中下ノ三ツニ分チ、上ノ卷ニハ佛法ノ空無ヲ本トセハ皆邪ナル法也ト嫌イ退ケ、中ノ卷ニハ儒道ト神道ノ趣ヲ論シテ、キリシタンノ眞ノ教ニハ遙ニ異ナル理ヲ示シ、下ノ卷ニハ五宗キリシタンノ教ノ眞ヲカツ揚テ顯シ侍。ナヘテハ言葉ノツタナキニモカ、ハラス、殊ニハ才ノ短キヲモカヘリミス、唯眞ノ御主スノ世ニアカメラレ玉フヘキヲヲノミ希テ、偏ニ身ノ嘲リヲ忘レ畢。是併當來生天ノ結縁ヲアフキ奉ルカ爲也。不于齋巴鼻庵敬白

之にて大體本書の内容を知ることが出来る。即ちヨシアル人の婦人後室に對して基督教を宣傳する目的の爲に書かれたもので、要するに當時の上流婦人に對する傳道書である。而してその宣傳の方法としては、所謂破邪顯正の順序を以て、先づ上卷に於て、佛教を破し、次に中卷に於て儒道神道を斥け、最後の下卷に於て吾が宗キリシタンの眞を發揚したのであつた。婦人を目的としたる爲に、その文體用語は、極めて平易通俗を尙び、而かもその形式を兩女子の問答體にせるなど、實にその用意の周到なるを見ることが出来る。

三 著作の年代

著作の慶長十年（西曆一六〇四）なることは、本書中卷の神道を破せる中に「應神天皇ノ治世十五年ニ當リテ百濟國ヨリ經典ヲ渡シ、其ヨリ已來コトカダ今年慶長十年ニ及テハ」とあるによりて明かである。ジエスイトの宣教師フランシス、ザギエルガ始めて我國に渡來してから當る五十五年、近畿地方に基督教が入

つて始めて京都の四條坊門に南蠻寺が建てられてより三十五年目に、本書が生まれたのであつた。

四 本書の著者

著者は、本書の跋文に不于齋巴鼻庵とあり、又羅山文集にも不于氏又は子とあるのであるが、これは *anFahien* の漢字名なることは明かであつて、子はまさに子に改むべきである。處がこのフカン、フア

ピアンに關する史料として今日まで世に現はれたるもの、中で確實なるものは、(一)羅山文集に見ゆる排耶蘇の文、(二)天草吉利支丹版の平家物語拔書である。

(一)羅山文集によると、羅山は慶長十一年の六月十五日に、頌遊と云ふもの、仲介で、當時京都の耶蘇會に居たるフアピアンを訪ね、彼に面接して、耶教に關し嚴しく論難攻撃を交へたるのみならず、フアピアン著述たる本書を彼自身に讀ましめて之を聽聞したのである。その一節を引用するに、

又見妙貞問答。是子之所作也。使子讀之。其書設妙秀幽真兩尼互問答之。或論釋氏十宗之外加一

或言儒道及神道。無一可觀者。皆綴和語之卑俚。而漫叫騷罵。聞之如蚊虻之過前。豈介於懷乎雖然侮聖人之罪、是可忍也、熟不可忍也。若又以是惑下愚庸々者、則罪又愈大也。不如火其書。若存則遺後世千歲之笑。

之によれば、今神宮文庫本に缺けて居る本書の上巻が、釋氏を論じたるもので、十宗の外、一向日蓮を加へたる十二宗を論破したるものであつたことが知られる。又羅山のフアピアンに會つたのは慶長十一年

とあるからまさに本書の出来た翌年であつて、當時フアビアンは京都の耶蘇會に居て宣教に活動したる邦人イルマンの一人であることが知られるのである。

(二)天草吉利支丹版の平家物語は大英博物館所藏であつて、その委曲なる解説は、新村文學博士の南蠻記に見えて居るが、それによるに、本書の編者の緒言の終に、「時に御出世一五九二、デゼンプロ、十。フカシ・フアビアン謹んで書す」とある相である。本書は天草に於てその翌年即ち文祿二年(西曆一五九三)に梓行されたので、妙貞問答に先だつ十二年前のフカシ・フアビアンの著述である。抑もフアビアンといふ名稱は、契利斯督記にも見ゆる通り、男のヘヤトの一人なる教名であるから、之だけを以て妙貞問答のフアビアンと本書平家物語のフアビアンとを同一人視することは或は輕卒で有らうが、兩者ともにフカシを冠して居る處から見ると、同一人たることは相違ない。

フカシは妙貞問答に不于齋フカシとあるのが本義で有らう。不于は左傳にも天爲剛德猶不于時フカシなどある如く于めずとフカシか于さずと訓みてこの人の漢風の號であつたので有らう。殊に羅山が彼を呼ぶに不于又は于氏フカシ或は子として居る處から考へても、この方が當時我が邦人側で通用された彼の名であつたとも思はれる猶後考を俟つ。

以上は尤も確實なるフカシ・フアビアンに關する史料であるが、今一つ粗同じ確實の程度に於て附加すべき史料は即ち西史パリエール日本宗敎史に見ゆる「イルマン」フアビアンの事跡と、妙貞問答に後る、十五年元

和六年(西曆一六二〇)に出版されたる破提字子の著述である。パジエーの史によると、慶長十二年(西曆一六〇七)に管長バシオ Pacheco (Luis Paz) が譯官ロドリゲズを伴うて江戸に將軍を訪うた時、駿府に於て耶蘇迫害の誤謬を知らしめん爲に、本多上野介に、「イルマン」フアビアンが輯録せる一篇の吉利支丹教義書を獻じたとあること、及び耶蘇會の「イルマン」にして背教者たるフアビアンといへる者が、排耶の一書を草したとある。又破提字子は人も知る如く我が邦文にて記されたる排耶の一書にして、而かもその作者がフアビアンと題せられ、時代に於ても同一である上に、この書と、妙貞問答との比較考察から、何うしてもこの破提字子の作者なるフアビアンは、妙貞問答の不干齋フアビアンであらねばならぬ内容上の類似があるのである。而して本書の中に、著者自らその經歷を語れる處を拾ひ集めると、一、彼は十九歳にて出家せしこと、一、彼は以來廿二三年間も耶蘇會にて修行し人の數にも數へらるゝ位地に達せしこと、一、彼は後耶蘇會を退きて、暫く奈良に住みしが、此地にて耶蘇教徒の迫害を受けし爲め、河内國牧方宿の上中宮に隱居せしこと等である。

一、十九歳にて耶蘇會に入る

一、文祿元年(西曆一五九二)羅馬字綴にて平家物語抄を編す

一、慶長十年(西曆一六〇四)妙貞問答を著す

一、同十一年（西曆一六〇五）この頃、京都なる耶蘇會に於て宣教に従ひ、本年六月十五日林羅山と會見し、互に法論を戦はす。

一、慶長十二年以前に於て吉利支丹教義書を編したることあり。

一、四十一二歳の頃耶蘇會を脱したる後、奈良牧方地方に住せしことあり。

一、元和六年（西曆一六二〇）破提字子を著す、

五 本書の史的價值

彼の經歷として知りうる凡ては此の如き零碎的のものではあるが、彼の後世への遺産たる平家物語抄、妙貞問答、破提字子は、幸に今日に傳へられて、色々の意味から、色々の方面から考へて文獻史上尤も貴重なる位地に數へらるゝは彼にとりても望外の満足と云はねばならぬ。新村文學博士は南蠻記に於て、フアピアンの經歷を叙して、最後に、

予は一步を進めて、平家物語の俗譯も亦天草の學校に於て文才ありて敏慧なる彼の手に成りし者と考へ、語學の俊才ロドリゲズをも佐けて天草及び長崎に語學書の編纂に與かりしならんと想像す。一五九九慶長四年長崎にて刊行せられしと思はるゝ國字の譯書「ぎや●●●●へかどうる」亦同一の手に成りしにあらずやとも臆測すれど、前條と合はせて他日の考を期せんとす。平家と合綴せるイソポの物語の

編者も、同一なりや否や亦定め難し。唯桃山時代の標準語を以て、問答體に、趣向面白く平家を和ら

げたる此の書。平家物語抜書を推すあり。たゞひ西教史上に其名滅すとも國語史上に之を記念して可ならんか。と、彼の比較的弱年の作なる平家物語抄を以て、國語學史上の一記念物と推奨せられて居ると同時に、本書、妙貞問答が世に現はれて、之を仔細に點檢することよりて、西教傳來當初に於ける彼教徒等の我が國體觀、及び我が既存宗教に對する彼等の觀察理解并にその態度を實際に知ることが出來て、從來の史家に數へられて居た耶蘇教禁制の理由の外に、今少し根本的なる内在的原因を認むると共に、又この原因が過去より現在に通ずる彼の宗宣傳者の共通のものではないかとの暗示をも認むることを得るならば彼及びこの書の存在は、我が西教傳來史上に於て永久に記念せらるべきものではあるまいか。

六 附 記

著者フカン・フアビアンのこと就ては、前述の外に新村文學博士の精細周到なる考證が、南蠻記の「天草吉利支丹版の平家物語拔書及び其編者について」の中に發表せられて居る。又本記者の粗雜なる報告書「妙貞問答及びその著者に就て」の史學雜誌第貳拾九編第二號にある。本解題はたゞ此等の摘要に過ぎない。

(大正八・二・一四)

